百々裏話(5)

おもて　あきら

清経　申楽談儀によれば、この曲は世阿弥作である。修羅物などと呼ぶのは適わしくないほど恋慕の色が濃く、内容・構成ともに二番目物の中では異色ある作品と言えよう。

清経の詞章は、上懸り（観世・宝生）と下懸り（金春・金剛・喜多）でかなり大きな違いがある。一番大きい相違はクセの前の部分である。一体、清経は、シテが床几にかかつて九州での有様を語り出すところを境として、前半はかこちかこたる恋慕の状、後半が清経入水の状と、比較的明瞭に区別された構成を取つているのであるが、上懸りでは、清経の物語りの最中にツレが「かやうに申せば猶も身の、恨みに似たることなれども」といきなり横槍を入れる。これは長々しい話に耳を傾ける余裕もないほど感情の昂ぶつている妻の気持を示すのかも知れないが、一曲の流れを障げており、演ずる上でも困るところらしい。それが下懸りでは、妻の横槍と、それに答えるシテのやりとりが無く、「即ち奉幣のためなるべし」からすぐ「世の中の……」の神詠に飛び、そのあとに「かやうに聞えしかば新中納言取りあへず」の一句が入つて「さりともと……」の歌になる。下懸りの文句では少々説明が足りない感もあるが、私は上懸りの方が改修したものではないかと考えている。この相違などは、一曲の構成に影響を及ぼしているものと言うべきで、単なる詞章の相違として片付けるべきではあるまい。これほど大きくはないが、清経入水のことをワキから聞いたツレの嘆きの謡もかなり違う。観世では「われと身を投げ給ふ事、偽りなりつるかねことかな」とある部分が、下懸りでは「われと身を投げ給ひぬれば、もしは変らで同じ世に、めぐりや逢ふとたのめおきし、ことの葉までも今ははや、偽りなりける恨めしさよ」とあつて、観世では内容のわからない「かねこと」が具体的に示されているのである。これも下懸りの方が原形ではないかと思つている。

清経の観世流謡本では、天文二十三年観世小次郎元頼筆の本が管見に入つた最古の本であるが、これはまだ精査していない。それと同系統と思われる天理図書館本で見ると、右に述べた下懸りとの相違点は今日と同様であるが、細部には少々今の文句と違いがあり、宝生流の詞章により近い。ワキとツレの対面の際、「さて唯今は何の為の御使にてあるぞ」と問われたワキは、さめざめと泣きながら、「さん候、かくと申さんために是迄参りて候へ共、何と申上ぐべきやらん、是非をもわきまへず候」と独白する。この独白は今は観世流のみが省いているが、古写本では他の諸流と同様に残されている。これは観世黒雪が元和卯月本刊行の際に除いてしまつたものらしい。或は柏崎のワキ小太郎の独白と同様であることが気になつたのかも知れない。

もう一つ妙な違いは、「豊前の国柳が浦」が、古写本では「豊後の国柳が浦」となつていることだ。清経の典拠たる源平盛衰記を見るまでもなく、これは豊前が正しく豊後は誤まりである。誤写でないことは確実なので、観世流では一時「豊後の国」と誤まつて謡つていたのかも知れない。なお下懸りの車屋本ではすべて「柳が浦」とあるだけで、豊前も豊後も使つていない。因みに豊前の国の柳が浦は、豊後の国に近い宇佐郡と、筑前に近い企救郡と、二ヶ所にあるが、清経が入水したのは企救郡の方である。

清経のキリは修羅道（とは言つても地獄道と混同している）の苦患をのべたもので、聞いていると修羅ノリの勇壮な拍子にごまかされてしまうが、すこぶる難解な文句である。「アイヨクトノイチツウゲンドウジョウ」など、愛欲貪瞋痴痛患闘諍の訛りではないかと考えられているが、どうもよく解らない。長い間意味など考えずに謡つているうちに訛つてしまつたのであろうか。「雨は矢先、土は精剣、山は鉄城」は解るが、「雲の旗手をついて」も難解である。「雲は敵の旗となつて」とか「雲の旗を突き立て」とか、解されているが、能勢先生は、能の型を見ると扇を左手にとつて楯として押し進む形であるところから原文は「雲のたてをついて」ではなかつたかとの説を出しておられる（謡曲講義）。しかし「雲の旗手」が歌ことばとして広く用いられているのに対し「雲の楯」なることばがあまり使われていないことと、扇を楯にして押し進む型が必らずしも清経独自の型でないことが、能勢先生説によつて少し邪魔になろう。或は「雲の旗手」は、雲の旗と楯を掛けたもので、「雲の旗をなびかし、楯をついて」の意ではないかと考えたりしているが、どうもよく解らぬ文句である。

当麻　世阿弥の五音に、この曲のシテ登場後のサシ謡の冒頭の一句「有難や」と、クリの「そもそもこの当麻のまんだらと申すは」の二ヶ所が、ともに節附者名無しで出ているので、世阿弥の作品らしい。

観世流古写謡本では、永正十三年（一五一六年。四四一年前）七月十三日に、観世弥次郎長俊自筆の本が観世宗家に残されている。書写年月の明らかな本としては、世阿弥自筆本を別とすれば、最古に属する謡本である。永正十三年は弥次郎の父観世小次郎信光の歿した年であり、観世新九年家の伝称によればその忌日は七月七日であると言う。小林静雄氏はこのことから、弥次郎が亡父の初七日に当る日に、父の冥福を祈つて、あたかも写経するような気持で、筆写したのが右の謡本であろうと推測されている。当麻はいかにもその推測にふさわしい宗教的情趣の濃い曲である。金春流の古写本では、金春禅鳳自筆本が能楽研究所と生駒宝山寺に蔵されている。当麻は上懸り下懸りとも最古に属する貴重本が残されているわけであるが、灯台下暗しとやら、まだよく調べてみたことがない。

（五・一）

8月　能　燭　蠟

井筒　素謡　華雪之丞
松虫　袴能　寿夫　勧盃之舞
鵜飼　狂言・仕舞　装束能　静夫

舞台　於　仙鐘会

秋の別会　10月27日

邯鄲　静夫
舞囃子　未定　華雪会
松風　見留　鐃之丞
安達原　寿夫　観世

長糸之伝
白頭
急進之出

於　館